

研究推進委員会通信

令和元年9月20日

9月19日(木曜日)に本校で第2回授業研究会を実施しました。伊藤先生は、「ICT機器をどのように活用していく」のか、また連携型中高一貫教育のパートナー校である郡上市立白鳥中学校が取り組んでいる「チャレンジタイム」と「小集団活動」をどのように導入していくのかを示していただき、参観していた50分の授業時間の中で大きな実りが得られました。印象的だったのは、生徒が教員の発問に対して自らが考えをもち、ペアの生徒や前後の生徒と対話し、さらに応用問題で知識を活用していくという姿です。最後のチャレンジ問題でもペアと相談しながら意欲的に取り組もうとしていました。

生徒が学びに向かうためには基礎学力が欠かせません。すぐにでも伊藤先生の授業を参考にしたいところですが、棚野先生が述べられたように、目的と手段が混同して「活動あって学びなし」の授業にならないために、知識の基礎・基本の定着を確実にしていく授業づくりの必要性を感じます。白鳥中学校を卒業した本校の1年生はチャレンジタイムを経験しています。ぜひ、後期中に1回は思考を促す授業を実施してみてください。

今回も異校種の先生が参加していただき、ご助言をいただきました。今回の通信ではそちらを紹介したいと思います。各先生に参考にさせていただけたらと思います。

- ・生徒が有益な時間と捉えているか考えさせたい。乗り越える時間から対話の時間という段階を明確にする。
- ・グループでの話し合いがサクッとできて良かった。
- ・中学校では、当該学年ですべきことを明確にしている(注:前号で示した学びの地図)。シンプルな単元構成になったため、生徒も無理なく学べるようになった。※高校でも学習指導要領を熟読しなくては……。
- ・中高で合同テーマで研究してみたい。中高合同の教科部会を実施したい。※白鳥中は本校同様若手が多く、各教科の人数が少なく教科部会の実施が難しいのです。12年の学びのつながりを考えるには中心の白鳥中との研究は不可欠かもしれません。
- ・どのような生徒を育てたいかかを話し合うことが大切。
- ・論理的に長く話ができていくことに感心した。※伊藤先生は根拠をもとに話をさせることに重点を置いていました。
- ・コンパクト授業研究会はスッキリしていてストレスにならない。
- ・参観していない先生に発表してもらおうというのはすごい。本校でも取り入れたい。
- ・小中で大切にしているのは「見通し」をもたせること。また「自分の考え」をもたせる時間、「交流」の時間を設けること。こうしたことが取り入れられており、学びの系統性を意識したものだと感じました。
- ・次は実験の仕方を考えるという終末が良かった。
- ・他教科の先生が、こうした授業をどのように感じ、自身の教科にどう生かしていくかが重要である。

岐阜大学教職大学院の棚野教授は研究推進委員会が発足した平成29年度から3年間継続して来校していただいています。授業研究会ならびにその後の懇談で下記のとおりご助言をいただきました。

- ・研究会をはじめたころは授業参観の際は生徒の変容に目がいかず俯瞰的に参観する姿が見えたが、3年間続けていったことで若手教員を中心に生徒の変容を捉えようとしていた。そのため、授業研究会における発言も、以前は「板書が見やすい・ICT機器が使用されている」程度に留まっていたものが、指導によってどのような変容があったかまで目が届いており質の向上がみられる。
- ・以前は校内での研修に留まっていたが、連携型中高一貫の仕組みを活かしながら深い学びになっている。これからも教員の学び続ける姿勢は必要である。2020年から3年間で教育環境は激変する。